

木村哲行

モンゴル草原
サイシシガ家の人々



葦書房

モンゴル草原
サイシンの人々

モンゴル草原

サイシンの人々



木村哲行

葦書房

モンゴル草原
サイシンガ家の人々

平成六年三月二五日初版発行

著者 木村哲行

発行者 久本三多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂三丁目一番二号

電話福岡〇九二(七六一)二八九五

振替 福岡一―三九四三〇

印刷・製本 栄光印刷株式会社

© Kimura Tetsuyuki 1994

定価はカバーに表示しています

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-7512-0556-0

目次

一	草原の憂愁	3
二	アイルの人たち	22
三	人々の絆	45
四	秋たけなわの頃	69
五	草原の厄日	87
六	タヒルの賑い	107
七	人と犬と狼	132
八	冬越しの仕度	153
九	寒い冬の始まり	173
十	サイシंगाの悲哀	195



内蒙古略図 (1943年当時)

一 草原の憂愁

高い空の上は、疾風にでも見舞われているのであろうか、雲が千切れるように飛んでいた。その遙か下の草原には、ボルジョマル（蒙古雲雀）の囀りが、辺りの静寂を震わせながら伝わってくる。

そうして空の青に向って飛翔をつづけるのか、か細くなつた歌声も、やがては涯しない天空の彼方にかき消されてゆく。

一九四三年、八月のことである。

西ウヂムチン（註二）の、豊かな草地に降り注ぐ太陽の光は、いくらか暑さの衰えを感じさせていたが、まだ青草のいきれがむんむんとして、ウブスン・タラ（草原）特有の強い薫りが一面に漂っていた。

また、絶えず涼風が優しく吹きつけてきて、ほんのりと汗ばんだチャムチャ（肌衣）を通し、騎馬の人達を如何にも爽やかな良い気持ちにさせていた。

左手のなだらかな丘陵には、点々と散った家畜の群が、ちやうど地肌に生じたヌルグ（雀斑）のように望見され、その稜線に屹立するチョローティオボ（註二）の姿が、澄んだ蒼空にくっきりと描き出されていた。

やがてホゼル（ソーダ）地帯に入って行くと、そこには所どころ、白くホゼルを吹き出した地表が現われ、その様相が更に右手の方に可成り開けている。

しかし其の遙か向うは、疎らな草生地となっている。おそらく北の「ゴビ」（註三）まで延びているのではなからうか。

地続きの緩やかなうねりを幾つか越えて、遠いところで薄くぼんやりと霞んで見える。永遠に交わることがない二条の轍が、騎馬の前方を涯しなく走っていた。

どこかに潜んでいたのであろう、道傍から時折り思い出したように飛び立つボルジョマルが馬達の鼻面をかすめて、これらの温順しい動物を驚かすのだった。

二人の騎士は馬の歩調をゆるめてマラガ（帽子）を取り、長いゲジク（弁髪、ぺんばつ）に風を入れた。

「なあ、おいバトマよ！

あの丘の上に見えるチョローティオボは、今も昔も変らんのじゃが、近頃はなんと世知辛い世の中になりよったことだ。

お前達若い者には、それ程まで感じとれぬかも知れぬが、長い生涯を過してきたこのわしだけに、きびしい今の御時世が嘆かわれて仕方がないものじゃよ！」

サイシンガは老いの目をしばたかせ、胡麻塩頭をなでつけながら息子のバトマに話しかけた。

「ほんとうにのバトマ、それだからこそ、余計に懐しい昔のことが想い出されてくるものじゃ。

昔といつてもな、わしがまだ働き盛りの頃だった。

王府のチャラン（札幌、註四）を勤めた時代が、矢張り一番良かったように思われるがの……。

当時はな、ヒタット・マイマイ（支那商人）も大層に商売氣質が良かったもので、いろいろの品が安く買われよった。

あのチョローティオボの麓にある舗子（ブーズ、店舗）からは、支那菓子などを、いつも背負籠いっぱい買って来たりしたものじゃ」

彼は話を続けていたが、急に口をつぐむと両肩で深い溜息をついた。

そうして今度は、さも憎にくしげにバトマに向い言葉を投げかけるのであった。

「忌わしい戦争とやらを始めおって、すべてが変わりよった！」

呪わしい言葉を吐き出すサイシングにとって見れば、それだけの思いがあつた。

今の時代と比べてみると、過ぎ去つた昔のことが、殊更良く想われてならなかつたのである。

サイシングがヂャランの栄職に任命されたのは、彼がまだ若くて壮んな頃であつた。

ラマ教を深く理解する役柄に在つた者として、毎日を平穩に面白可笑しく送れる時代が暫くは続いた。

それもサイシング個人だけでなく、草原で生きる凡べての同族にとつても同じように、平和で楽しい生活の営みが与えられていたのである。

それに、遊牧の民であるモンゴルの人々は、草原に屯するヒタト・マイマイの仲介で、牲畜や毛皮類を売り、必要な生活物資を自由に入手することが出来た。

また多くの人々が、中国大洋錢に換えることがあつた。

その頃、ムングヌ・トグリク（大洋錢、ダーヤンチェヌ）は値打物で、鈍い銀色に輝くずつしりと重い銀貨であつた。中国全土はおろか、広く蒙古草原にまで通用していた。

それを銀匠が鑄つぶして、指輪や腕輪、髪飾りなどを作り上げた。蒙古刀に木碗、そのほか諸々の細工物にも銀が多く使われたのである。

春になって新緑が萌え、高原の花ばなが一斉に咲き始めると、人々の息吹もまた蘇ってくる。

競馬、角力、オボ祭りなどの催し物が次つぎとある。無限に拡がる草原を舞台にして、上はワン・ノイン（王侯）から下はチャロチン（使用人）まで、なんの気兼ねもなく、自由な時を過したものである。

まだまだ日用品には事欠かず、食料品、衣料品もふんだんにあった。

だからこそサイシングはこの頃になって、昔の良き時代に想いを繞らすことが多くなっていた。そうして、あれから随分変わったものと、つくづく考えるようになった。

彼は年代の移ろいを指折り数えながら、自分達ではどうにもならぬ非力さを、いまは嫌というほど感じとっていた。

よその国からやって来た、目には見えぬ力が、いつの間にか草原の活らしを締めつけ始めたのである。

「これから一体どうなるものやら……」

南の方で戦争が起つてからもう何年にもなる。そのためか、不自由さを増してきた近頃の生活が、更に悪くなつて行くのではないかという不安を、彼は本能的に嗅ぎとっていた。

南の国で戦争（日中戦争）が始まって取分け困ったのは、いままで中国の奥地から搬入されていたチヨローヌ・チャイ（磚茶、てん茶）が途絶えたことである。

磚茶は、原葉を蒸して煉瓦状に固め、乾燥したものである。

モンゴルの人々は、これを削り焚き出して少量の牛乳を加え、スーティチャイ（牛乳茶）として常用する。

磚茶は四川省の重慶地方で産出されるものが、最も上質とされていた。

永いあいだ使い馴れた茶の味が、人々にとっては何物にも替えがたいものであり、唯一の必需品であった。

草原の人々にとって一番大切なものが、戦争が始まった為に跡絶えてしまったのである。間もなく日本から静岡産の磚茶が、代用品として出廻るようになった。

馴染みがうすい日本からの茶を、人々は飲用しなければならなかった。草原で生きて行くためには、仕方のないことであった。

彼等の周辺に、なに一つ願ひもしなかったことが押し寄せてくる。

だがこんな嫌な気持ち、彼等はどこにぶちまけたら良いものか判らなかった。

大きな声で抗らう勇氣もなく、ただ気が許せる身内の者か、限られた親しい者達との間で、控え目に、しかも辺りをはばかりて耳打ちし合っていたに過ぎない。

そうして事あるたんび、押しつけられた無理難題をやり済ましたあとで、

「仕事がない。テングリ（天）のみが御存じである」

と自慰の言葉を吐いたものである。

すべてを天に任せている。天の神が何事も知っている。いつかはこの不条理に、天の鉄槌が下されるに違いない。いや、もうそれが来つつあるとさえ、彼等は一様に考え始めていた。

二人の間に、しばらく沈黙が続いた。

並足になった馬の背に揺られながらサイシングは、またも吾が息子に話しかけた。

「なあバトマよ、こともあろうに遠いところから、態々この土地までやって来て、しかも余計なお節介をする者達の気が知れんということだ。

てつきり、家畜を取り上げようと目論んどるに違いない。

それに、昔から平穩無事に暮らしてきた草原のしきたりに叛いて、なにもかも向う様の都合がよい流儀に改めようとしとる。

なるほど、いまだきの若い者の中にも、都や街から、進んだ学問という奴を身につけてノトク（在所）に帰り、いろいろ過激なことを云い触らして廻る連中がおると聞いてはいるが……。

しかし、よその国から来た連中が人様のところに来て、自分達の仕来りを押しつけようとしてかかる。

これこそ、厄介者と云われても仕方があるまい」

サイシंगाの語調は、いくらか怒りをこめてきたが、まだ極めて落着いたものである。息子のバトマも、親爺の吐く意見には同感である。

だが、もともと温順しい性格のバトマは、今日自分に投げかける親爺の強い口調には、目を瞠るほどであった。

常日頃、彼は親に似ず至つて無口の方である。ことし三十歳になったばかりで、傍目では、見るからに屈強な若者であった。

いま彼等親子は、西ウヂムチン王府に在るワングン・スム（王府廟）に詣でての帰り途である。

スム（廟）の中には、サイシंगाの総領息子である喇嘛僧、ドゴルヂャプが居室を構えている。

彼等はドゴルヂャプの部屋で、二日間の滞在を許された。詣でのかたわら、御仏に捧げた吾が身内を労い、夏の供物を届けたのであった。

ドゴルチャプは、サイシンガと最初の妻との間に生まれたエレ（男子）である。

ラマ僧としての修行をするため、まだ年端も行かぬ頃から、このワングン・スムに弟子として預けられた。

師匠のラマに就いて永いあいだ研鑽を積んで、いまでは学僧として上位の階級に登っている。

サイシンガの言葉に、黙つてうなずいていたバトマは、若者の眼を異様に輝かせながら口を切った。

「昨夜、兄ラマから聞いたのだけど、なんでも近いうちに、お寺の規則がえらく厳しくなるとのことでした。

これは皆、アルバ（政府）のお役人達が、頭ごなしに決められたと、専らの噂話だそうです。一つのアイル（集落、註五）から、三人以上の男が産まれぬ時は、息子をラマとして差出すことは罷りならぬ、というお布令が出されますそう。

どうやら一人でも余計に、蒙古人の兵隊を作り上げるのが目的だそうです。

道理で、このごろ建った学校では、私共が知らぬ戦の歌を、子供達が足踏みしながらよく唱っていると聞いていました」

サイシंगाはかつて、西ウヂムチン内に存在する、すべての寺廟を監督する地位にあった。永いあいだ、そんな役目のヂャランを勤め上げただけに、法事については誰よりも釈しかった。

「そんな馬鹿なことがあるもんか！

この世の中で、一門から九人の僧侶が出たら、それこそ、その一族は天に通ずと云われている。

貴いボルハン（御仏）に、子供をより多く捧げれば、弟子に入つた本人はおろか、残された家族や親族までも、来世に於いて極楽行きが約束されるのじゃ。

だというのにそれとは反対に、子供達を兵隊に仕立てるとは何事だ！

ヒタット（支那人）さえも云うとるじゃないか。

好鉄不打釘、好人不当兵へ良い鉄では釘を作らず、良い人は兵隊にならずとな！

ほんとうに、的を射た言葉というより外はない。まして兵隊を多く作り上げたとしても、どこと戦争をおつ始める積もりだろうよ。

平和なこの大地に、血の雨を降らすとは真つ平なことじゃ」

少しづつ憤りを増してきたサイシंगाの口吻には、アルバ（お上）を呪うような怒気さえ感じられるのであった。

サイシングはヂャランの職を辞めてから随分になるが、無事、長勤めを果した功績によって、いまではハイリン・ヂャヒロクチ（名譽鎮国公、註六）の爵位を拝領している。

彼の信仰心の篤さは、伝統的な親譲りのものであった。それに若い時からの学問好みと、永らくヂャランの職に在ったことが深くかわつていた。

だからこそ老いを加えたこんにちでは、ひたすら御仏への信心とその加護を願った、信仰一筋の毎日なのである。

まだ壮んだった頃、御仏に対する信仰心の証しとして、西方の清浄な聖地、チベットのポタラ宮殿（註七）に詣でる巡礼の旅を念じ続けていたことがある。

喇嘛教徒であれば、誰しもが悲願としている一生に一度の聖地詣であつた。

だが結局は希みが叶わず、年月がたつて五体が不自由になると、そんな夢は手が届かぬ遠い昔のものとなつてしまった。

聖地巡礼をすっかり諦めたサイシングにとって、或る時、嬉しい出来事があつた。

貴重なホーログ（嗅ぎ煙草入れ）を支那買売から手に入れたのである。

容器の表面は、玄奘法師が西方行脚した故事を浮彫りにしたものであつた。

それからいうものは、ホーログを帯に挟んだダーリン（提袋）に入れ、肌身はなさず持ち

歩いている。

玄奘法師が艱難辛苦してチベット詣でをした、偉大な徳にあやかうと願ったのである。瑪瑙が素材であるホーログが、サイシンガにとつては自慢の一つとなった。

お互いに、ホーログを取り交わして行かう草原の挨拶がすんだあと、彼が持っている貴重な骨董品を、誰一人として賞めぬ者はなかった。

こんなことでも、だんだん信仰心が高じてくる老後の生活に、大きな心の支えを与えていた。

いっぽう息子のバトマはサイシンガと違って、若い所為もありまだ深い教理などには無関心である。ただ御仏というものは、いかにも貴くて有難い存在であり、草原の生活では人々にとつて、心の依りどころであるということは充分に弁えていた。

だから信心深い親爺に倣って、彼なりの信仰心を持っていたのである。それに幼い時から、寝物語で親爺によく聞かされたボルハン（御仏）の話を、至極もつともだと考えるようになった。

サイシンガは心に溜まっていた憤りを吐き出し、そのあと気分が落ち着いたのか、静かに目を閉じ馬の背にゆられていた。